

氏名	大河内 範子
学位の種類	博士 (心理学)
学位記番号	院博甲第 19 号
学位授与年月日	2019 年 3 月 18 日
学位授与条件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位論文題目	膠原病患者への支援における心理専門家の役割 ——当事者と医師へのインタビュー調査から——
論文審査委員	主査 田中 速 東京成徳大学大学院 教授 副査 田村 節子 東京成徳大学大学院 教授 吉田 富二雄 東京成徳大学大学院 教授 井上 忠典 東京成徳大学大学院 教授

1. 論文概要：(1) 目的, (2) 方法, (3) 結果及び考察

(1) 目的：本研究の目的は膠原病患者への支援における心理専門家の役割を明確にすることである。膠原病は複数の病気の総称でありわが国の難病指定疾患に指定された病気も多く含まれる。身体的機能や社会生活も損なわれるため患者の心理的な負担は大きく心理的な支援が欠かせない。心理職であり当事者でもある筆者が探索的な研究を行ったことに本研究の大きな意義があると言える。

(2) 方法：本研究の主たる方法として、複線経路・等至性モデルや修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) 等の質的研究が用いられている。本研究の問いの性質上仮説が立てられないため質的研究を用いることは妥当であり、適用の仕方についても示唆に富むものがある。

(3) 結果と考察：本研究の結果として、①膠原病患者の心理的特徴や心理的変容過程、②膠原病患者の心理的変容過程に沿った各科医師が患者に抱く感情や心理職に望む内容等により心理職の役割が明らかになった。具体的には、研究 1 では、膠原病のプロトタイプである全身性エリテマトーデス患者の心理的変容過程を明らかにした。患者が症状や治療だけでなく社会との関わりを通して心理的変容を経験することが明らかとなり、心理教育的支援、多職種チーム支援、患者同士の関わりでの促進が心理専門家に求められていると考えられた。

研究 2 では膠原病患者を対象としたサポート・グループの有用性と心理専門家の役割を明らかにした。研究 2-1 では、3 年間実施したサポート・グループの事例研究を行い、サポート・グループが膠原病患者の「居場所」として機能すること、「病気の再確認」の場となり「治療への適応」を促進すること、病気を患いながら生きることの積極的な意味を見出す機会となり「人生の再構築」を可能とすることが明らかになった。また心理専門家には「アセスメント」「テーマの見極め」「対等な場の提供」「情報共有の促進」の役割が求められていることが示された。

研究 2-2 では、サポート・グループに 1 年以上参加したメンバー 7 名に対するインタビュー研究を実施した。その結果、メンバーが病気による混乱と絶望を経験

しており、病気に適応するための工夫を行っていること、理解者を得ることの難しさが心理的葛藤を強めていることが明らかとなった。メンバーはサポート・グループの中でも理解者を得ることの難しさを感じるが、当事者でもある心理専門家を支えに心理的安定に至った。この結果は患者同士の関わりに心理専門家が関与することの意義を示唆した。

研究3では膠原病患者の治療にあたる医師へのインタビューから心理専門家の役割を明らかにした。研究3-1では膠原病内科医5名を対象とし膠原病内科医は難治性であるがゆえのジレンマによって心理的葛藤を抱くが、他科・多職種の助けを得ることによって患者の気持ちに配慮した治療に至ることが明らかとなった。

研究3-2では膠原病内科・皮膚科・精神科・小児科・整形外科の医師10名を対象とした。定性的データから医師は心理専門家に対して患者に対する心理的支援を求めており、加えて医療者への心理的支援も求めていることが明らかとなった。

2. 評価：

まず第1に研究テーマを評価したい。本研究は、「膠原病患者への心理的支援」を研究テーマとしている。しかしこれまで難病患者でもある膠原病患者の心理的特徴や心理的変容過程について詳細に研究したものは見当たらない。膠原病をよく知る筆者が当事者として本研究を行いその知見を一般化し、当事者でない心理専門家が援用できることを目指したテーマであることは特筆に値する。

第2に、調査対象者に対する質的研究法を選択したことを評価したい。本研究テーマは心理的特徴や心理的変容過程を明らかにした上で、心理専門家への役割を明確にすることを目的としているため定性的研究が妥当である。さらに、適切なデータを得るために、調査対象者（膠原病患者や医師等）と信頼関係を築きつつ納得した上で調査を依頼するという丁寧なプロセスを踏んでいたことも評価したい。また、筆者が膠原病患者へ敬意を払いつつ慎重かつリサーチクエスチョンにそって的確に定性的データを取得し分析したことは特筆に値する。

第3に、膠原病患者と医師それぞれが求める心理専門家の役割を明らかにしたことを評価したい。最後に本研究の課題として理論的飽和に至らなかったことや患者家族への心理的支援の検討等があげられる。しかしながら、本研究結果は、心理臨床における難病患者への援助の理論化および方法・技法の精錬に大きな示唆を与えたと言える。

3. 最終試験結果：

2019年2月9日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

4. 結論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

2019年2月10日